

〈論文〉

メキシコ市東南部の子どもたち

—— 「下層」¹⁾における事例研究——

増山久美

I はじめに・下層地区の形成とその背景

1 都市への急速な人口移動

本稿は、ラテンアメリカ社会において抑圧や疎外の下にある集団とみなされる下層の人々について、とくにその子どもたち²⁾の生活様態を分析するものである。

ラテンアメリカの多くの国々では1930年代以降、工業化の開始にともない農村から都市への人口移動が始まった。メキシコでは1950年代から政策の重点が工業化に移るとともに、農業はダイナミズムを失い、1960年代末より実質的に停滞状態に陥った。こうした農業不振は高い人口増加率と相まって多くの農村人口を都市へ押し出す原動力となった³⁾。農村から移住してきた人々は、都市周縁部に、不法な土地占拠あるいは非合法的分譲⁴⁾による土地購入によって居住地を確保していった。ネサワルコヨトルを典型的として、このような起源をもつ居住区の住環境は大半が劣悪であり、適切な住居に要される最低限の物的条件を欠く場合が多い⁵⁾。都市への移住者の数は増加の一途をたどっており、この背後には都市と農村の大きな所得格差の問題が存在している。移住者はメキシコ市内⁶⁾においては貧しい暮らしを送っている。しかし、その生活は農村地帯から見れば豊かである。それが人々を都市へと向かわせる原動力となっている⁷⁾。

しかも、移住者たちの文化は都市の生活様式に同化するどころか、文化的障壁の前に一層強化され、都市周縁部で再生産されるという⁸⁾。これによって都市の社会構造は多様化し、それとともに、都市と農村社会の関係も、従来の研究枠組みの中で捉えることが困難になるほど変化を遂げてきた。メキシコ市の都市下層地区の形成も、社会全体の大きな変化のうねりの表出のひとつと見ることができるだろう。

2 下層社会研究

かつて、農村から都市への移住者の生活様式を、内側から照らし出そうと試みたのがオスカー・ルイスである。彼は、貧困は一つの亜文化「貧困の文化」を創出すると述べる。彼によると、貧困の文化はそれ自体の様式を有し、その構成員に対して社会的、心理的な重要性を持ち、社会化されることでそれは永続化するという⁹⁾。これに対しリサ・A・デ・ロムニッツは、文化は経済、社会、イデオロギーの三つの性質と、それらの関係の総体として、もっと広範に定義づけられるべきであると反論している。彼女は、「経済基盤や社会組織に触れずに彼らの文化を言い表すとすれば、それはあたかもその文化自体に原因があるかのようなものである」とルイスを批判している¹⁰⁾。この見方に立って彼女は、下層地区の住民同士が行っている経済活動は単に原始的で時代遅れの経済手段ではなく、彼らの生活の極端な状況に対して、有効で活力があり、かつ発展した対応方法であるとより積極的な評価を下している。しかし、デ・ロムニッツも、このような人々を、疎外され社会の隙間に身を隠すカニとみなし、彼らが都市の維持発展に果たしている役割を無視するなど、都市社会全体の中で彼らがあたかも不必要な存在であるかのような見方を取っている。

ロジャー・N・ランカスターは、ニカラグアのマチスモ研究において、子どもたちは地域社会の中で社会化されるため下層においてマチスモは変わらないと主張しているが¹¹⁾、これもまた同様に、結果としてのマチスモの保持を、未来にわたって不変の特性であるかのように扱うものである。これらの研究はいずれも、下層の人々を他の階級から隔てられた閉鎖的な

社会・文化集団として捉えているが、大都市において彼らが他の社会階層と多彩な関係を結んでいることは無視することはできない。下層からの脱出が困難であることを、ただちに階層間流動が欠如しているかのように捉えることにも疑問が残る。

また、ロベルト・バレーラは、疎外されたセクターに、恵まれたセクターと競争できるような知識や技術を提供しないと、彼らは社会の隙間で生存していく術を模索することになると述べ、恵まれたセクターに属するための儀式として学校教育を捉えている¹²⁾。学校教育の重要性の指摘は肯定できるとしても、そこにはインフォーマルな経済活動を否定的に見る視点が存在しており、それはともすると社会的上層の優越感に同調しかねない危うさをはらんでいる。

これらに対し、エルナンド・デ・ソトは上述の諸研究とは異なる角度から下層の人々を分析している。彼は、リマ市におけるインフォーマル経済の研究のなかで、常設市場や公共輸送のほとんどがインフォーマルな活動によって成り立っている実態を挙げ、ペルーのような国家体制のもとでは、経済発展は公認された正式な活動を通してのみ起こるわけではないと述べている¹³⁾。ジョン・C・クロスも、メキシコ市における露店商人と国家の関係に関する研究において、インフォーマルな経済活動は、彼らが生き延びるために会得した経験と手腕の結果であり、それらがメキシコの全体社会の中で政治的にも経済的にも重要な役割を担っていると結論づけている¹⁴⁾。両者とも国家あるいは都市というより包括的な社会の中に都市下層民のインフォーマルな経済活動を位置づけ、しかもそれを否定的に捉えることなく議論を展開している点が評価できる。こうした異なる議論の可能性を考慮しながら、本稿では下層の子どもたちの姿に自由な思考と行動の主体としての可能性を探っていく。

II 調査について

メキシコ市のシウダー・ベルディーダなどのもっとも貧しい地区や、ス

トリート・チルドレンに関しては、都市への移住や都市開発面からの研究が多数あるが、下層地区の居住者ではあるものの極貧とは言いがたく、自立した生活を送っている人々について、ミクロな視点に立った情報や研究は少ない。とくに、そうした階層の子どもに焦点を当てた研究はまれであり、また研究者は彼らの社会的逸脱などに焦点を合わせ、生活の否定的側面を強調する傾向がある¹⁵⁾。そこで、本稿では視点を一新し、メキシコ市のイスタパラバ区とトラウアク区の下層の子どもたちを事例に、その積極的な生活様態を具体的に提示したい¹⁶⁾。

メキシコ市東南部に位置する両区は、今なお農村的な雰囲気をそここに残しつつも、筆者が観察を始めた1982年以降急速に都市化が進行している地域である。両区では、1994年の北米自由貿易協定（NAFTA）発効でメキシコがグローバル経済体制に参入して以後、町も人も特に急激な変化を遂げた。都市と農村、あるいは近代社会と伝統社会がモザイク状に混在するこの地域には、低所得層¹⁷⁾が多く居住する。

下層の子どもは、被搾取者である下層に生まれたことと、本来保護されるべき存在でありながら放置、放任ときには虐待すら行われていることから二重の枷を嵌められていると奥山恭子は述べている¹⁸⁾。マクロな視点からするこうした見方は社会構造上の問題点の指摘として重要ではあるが、その一方で「下層の子ども」を一般化し、その生活様態の否定的側面のみを強調することは、彼らの置かれた立場を救済されがたいものとして提示することにもなる。下層に生まれたという事実は、子どもの成長過程や将来設計において決定的要因として働くのだろうか。具体的には、親や親族から一方的に放置されているのだろうか。また、彼らの人生には何ら選択の余地がないのだろうか。本稿の目的は、これらの疑問に解答を与えることにある。

分析の際に参考にしたのがチャールズ・H・クーリーのいう「第一次集団」¹⁹⁾である。彼はこれを「顔と顔をつき合わせる親密な結びつきと協力によって特徴付けられる集団」と定義し、主として個人の社会性と理想

とを形成する上で基本的であるという点において「第一次的」としている。この集団の中で最も重要な分野が、家族、子どもたちの遊び仲間、近隣、もしくは大人たちの構成する地域集団などである。クーリーは、都市化における社会生活の必然的な結果として第一次集団の漸次的衰退を指摘してはいるものの、なお幼年期と少年期における第一次集団の社会化機能は重要であると主張している。特定の地域の子どもたちを論じるには、地域社会への社会化という観点から議論を進めることが有効であると推定されるため、本稿でもこれらの第一次集団との係わりに重点を置いて考察していく。まず幼児期における家族との係わり方と家族成員について、次に学齢期の子どもたちの姿と教師について、そして家庭や地域における子どもたちの活動と相互扶助についてという順に、三つの局面について見ていくこととする。

資料には参与観察の記録とアンケートを併用した。1982年7月から83年6月、1996年12月、1999年6月から7月にかけて現地で調査を行ったが、本稿では特に1999年6月3日から7月6日の調査で得られた資料を使用する。またアンケートも同時期に実施しており、その集計結果を用いる。アンケート調査は、地域の学校7カ所で実施した。7校を順次直接訪問し、教師の許可を得てクラスでアンケート用紙を配布し、筆者の補足説明のあと子どもたちにその場で無記名回答してもらった。将来設計や社会問題について問うため、調査学年は小学校（午前の部6校287人）、中学校（午前の部1校100人）とも最高学年に限定し、合計387人の協力を得た。回答中で家族成員として提供された資料の総数は2,629人分に及ぶ。以下本稿では、本アンケートの集計結果などをもとに、この地域の人々の生活様態の把握を試みたい²⁰⁾。

Ⅲ 学齢以前の子どもと家族的背景

1 家族の中の子ども

下層の人々については、就学前の子どもたちがしばしば放置され、安定

した社会化を経験していないとの指摘がなされてきた²¹⁾。確かに調査地区でも、両親が法律上承認されない「合意婚 (unión libre)」²²⁾による婚姻形態をとっている場合が多く、婚姻関係はときには長続きせず、また出稼ぎなどによって父親が不在であることもまれではない。だが、筆者の観察では、そのことが子どもの放置に直結するわけではない。合意婚であっても子どもたちが父母の養育を受けているケースは多く、父母以外の親族、特に母方の祖母やオバラが乳幼児の世話に積極的にかかわることもめずらしくない。アンケートによると、キョウダイの平均人数は4人（最高は11人）で、同じ敷地内もしくは同じ通り、同じ地区に親類が居住している子どもの数は387人中298人（77.0%）である。子どもたちはキョウダイだけではなくイトコ、姪、甥なども毎日何時間かを過ごし、何らかの形でしつけなどの初期の社会化を監督されている。

以下に述べる、合意婚による婚姻形態をとる夫婦の事例はそうしたしつけが実践されている一例である²³⁾。

ゴミ収集業に従事する父親と、技術系の高校 CONALEP の学生である母親を持つ1歳のKは、母親とその実家で暮らす。父親は同地区でその両親、姉妹と生活しており、毎日2時間ほどKに会いに来るほか、週末は半日を父子ともに過ごしており、Kの養育に必要な経済的負担も担っている。母親は午前部の部に通っているので、その間祖母と叔父、叔母たちが交代でKの面倒を見ている。午後母親が帰宅すると3時間ほど世話をし、その後彼女がアルバイトに出かけると、また祖母たちが世話をする。祖母が常在宅しているとは限らないが、代わりに世話をする者が何人かいるので、Kが無責任に放置されることはない。叔父たちも、Kにミルクを飲ませ、おむつを交換するといった協力を惜しまない。洗礼式や誕生日の祝宴は、父方母方双方の家族が協力して、Kのために行われた。両親は、母親が学業を終えるまではこの生活を続けるということで意見が一致している。

この例にみるように、この地区では就学前の子どもたちの大部分は少な

くとも両親のいずれかと生活を共にしている上、親族に囲まれていることが多い。アンケートでは387人中、両親と同居するのは305人(78.8%)、母親だけとの同居は65人(16.8%)、父親だけとの同居は18人(4.7%)である。メキシコ全体については、全未成年者のうち両親と同居するのは55.7%、母親だけとの同居は14.7%、母親とその夫との同居は12.6%、その他の者との同居は17%という報告があり²⁴⁾、両者を比較する限りでは、本稿の調査対象地区の子どもたちは、平均よりも両親と同居する割合は高いことになる。後者の調査にしても、父親が近くに居住し毎日子どもに会いに来る場合などを考慮していないため、この数字だけでただちに、多くの子どもが無責任に放置、疎外されているとは言いがたい。我々は、下層の人々の家族を論じるにあたって、ともすると核家族の不完全さに着目しがちであるが、核家族としては不完全でも、近隣に居住する親族同士が助け合い、拡大家族として十分に機能している状況を視野に入れる必要がある。ジョージ・P・マードックは、核家族における両親と子どもとの諸関係について、「家族の全体が子どもの世話に係わり合い、この協働を通して、さらに一体的となる」²⁵⁾と述べた。拡大家族を常態とする多くの社会では、その協働と一体化がより広範囲の親族の間で実現されることを考えれば、核家族の孤立性が問題となる現代にあつては、むしろそうした拡大家族のあり方に積極的な意味を見いだすこともできよう。

2 家族成員

子どもを囲む家族成員は多様な職業に従事し、学歴も様々である。表一は、アンケート回答に見る家族構成員の職業の集計結果であり、主婦、肉体労働者—主に工場労働、土木建築労働従事者—、商人—行商、屋台、露店、市場、小商店—が多数を占めていることがわかる。ここでいう主婦は、大部分が専業主婦ではなく、機会を見つけては洗濯屋、掃除婦、小商売、市場の手伝いをして収入を得ており、不定期とはいえ、彼女たちの収入は、時として不足する家計を補助している。教師が商人や運転手としても働くなど、副業を併せ持つ場合も多く、学生としてこの表中に算入され

表—1 家族成員の職業

(N—1, 183)

職業・身分	人数	%	職業・身分	人数	%	職業・身分	人数	%
主婦	343	29.0%	技術者	16	1.4%	掃除夫	9	0.8%
肉体労働者	298	25.2%	会計係り	16	1.4%	保母	8	0.7%
商人	159	13.4%	左官	13	1.1%	コンピュータ技師	7	0.6%
事務員	86	7.3%	仕立て屋	13	1.1%	スタイリスト	7	0.6%
運転手	49	4.1%	警察官	10	0.8%	看護婦	6	0.5%
教師	33	2.8%	電気工	10	0.8%	医師	5	0.4%
秘書	31	2.6%	農夫	10	0.8%	電話交換手	5	0.4%
連邦区職員	18	1.5%	機械修理工	9	0.8%	その他	22	1.9%

出所) アンケート調査より筆者作成。

注) 全体2,629人から乳幼児、学生、無職、無回答の合計1,446人を除いたもの。

なかった者でも、学業の傍ら何らかの手段で収入を得ていることは多いため、実際に人々が従事している職業はさらに多様である。

次に家族成員の学歴であるが、表—2によると、義務教育である小学校卒業や中学校卒業（92年から中学校までが義務教育となった）が多いとはいえ、高等教育を受けている者も少なくない。また、これらの表を作成するための資料となった家族ごとの調査票からは、一つの家族あるいは親族の中に、最終学歴が小学校卒業以下の者と高校卒業以上の者が混在（387家族中102家族（26.4%））する 경우가少なくないことも判明した。父親と母親の学歴は平均すると高くはないが、そのこととオジ、オバやキョウダイの学歴との間にはあまり関連性がない。アンケートに取り上げられた人々が通う、もしくは卒業した大学は、いずれもメキシコ国立自治大学（UNAM）と国立工科大学（POLITECNICO）であるが、UNAMの場合、調査当時の学費は年間20センターボ（約2円）なので、諸経費を考慮しても仕事と両立して学業を修めることは十分可能だったと考えられる。商人や肉体労働者の中にも高等教育を受けたものが見られ、また副業が一般的である状況などから、調査の対象となった人々が恵まれた就労環境にあるとは言いがたいが、他方では、家族成員の学歴と職業は多様であり、下層の人々が一様に低学歴で未熟練労働に従事せざるを得ない状況に追い込まれ

表一 2 家族成員の最終学歴

最終学歴	全 体		母 親		父 親	
	人数	%	人数	%	人数	%
大学院修了	7	0.5%	0	0.0%	2	0.6%
大学卒	85	6.1%	15	4.0%	31	9.1%
大学中退	13	0.9%	4	1.1%	7	2.0%
師範学校卒	10	0.7%	6	1.6%	2	0.6%
専門学校卒	57	4.1%	13	3.5%	7	2.0%
高校卒	115	8.2%	30	8.0%	26	7.6%
高校中退	19	1.4%	3	0.8%	7	2.0%
中高一貫校卒	29	2.1%	6	1.6%	13	3.8%
中高一貫校中退	3	0.2%	1	0.3%	1	0.3%
工業・技術・商業系高校卒	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
工業・技術・商業系高校中退	2	0.1%	1	0.3%	1	0.3%
その他の後期中等教育機関卒	22	1.6%	9	2.4%	11	3.2%
その他の後期中等教育機関中退	1	0.1%	0	0.0%	1	0.3%
中学校卒	381	27.2%	106	28.2%	93	27.2%
中学校中退	72	5.1%	17	4.5%	14	4.1%
小学校卒	284	20.2%	101	26.9%	77	22.5%
小学校中退	167	11.9%	43	11.4%	29	8.5%
無就学	111	7.9%	18	4.8%	16	4.7%
無回答	24	1.7%	3	0.8%	4	1.2%
総数	1,403		376		342	

出所) アンケート調査より筆者作成。

注1) 学生1,086人、乳幼児140人を除く。

注2) 高校は Preparatoria (UNAM の付属校) のこと。工業・技術・商業系高校には Vocacional (POLITECNICO の付属校の通称), CONALEP (Colegio Nacional de Educación Profesional Técnica, 連邦立専門教育校), CETIS (Centro de Estudios Tecnológicos Industriales y Servicios)が含まれる。その他の後期中等教育機関には Preparatoria Abierta (特定の選択科目を一年もしくは数ヶ月だけ学ぶ短期課程), CCH (Colegio de Ciencias y Humanidades, UNAM の付属校)が含まれる。

ているとは断言できない。この地区の人々にとり、学歴や職業は個人の選択と努力の余地が多分にあると捉えることができる。成長過程にある子どもたちが間近で見ているのは、このような多様な人生設計と言えるだろう。

IV この地区における学齢期の子ども

1 子どもと小学校

多様な生き方を追求する家族成員のなかで幼児期を過ごす子どもたちは、

小学校生活では何を習得しているのだろうか。メキシコでは小中学校が法律上義務教育だが、日本におけるほど人々は義務であることを真剣に受けとめていない²⁶⁾。子どもの数に対する学校不足を解消するための措置として、公立の小中学校は二部制をとっており、子どもたちは小学校入学時に午前の部か午後の部を選択しなければならない。選択においては家庭の事情もあるが、本人の希望が優先されることが多い。日本と同様、7歳が就学年齢だが、これについても経済的理由などによるほか、本人の意思により7歳を過ぎて入学する子どもたちがいる。人々は学校教育が必ずしも人生の成功に結びつくわけではないとしばしば言い、この結果、子どもたちにとって学校に通うことはきわめて自覚的な選択となる。

午前の部は8時から12時半（休憩時間10時半から11時）まで、午後の部は14時から18時半（休憩時間16時半から17時）までで、授業は実質4時間である。授業のカリキュラムや質は各教師により大きく異なり、生徒の側に選択の余地が与えられているため、人気のある教師のクラスには50人も生徒が登録する一方、評判の悪い教師のクラスには十数人が登録するだけという不釣り合いな状態が生じる。たとえ優秀な教師であろうと過度の生徒数では授業に支障をきたし、逆に、僅かな生徒数でも教師の質が悪ければ生徒が伸びず、均整をとるのは困難である。

また教師用の教材も不足しがちである。ヒルベルト・G・ニエブラによると、メキシコ市全体の小学校教師の50%がカセットを使用しており、16%が電卓を、15%がラジオを、10%がビデオを、そして9%がテレビを使用しているが²⁷⁾、本稿で調査対象となっている地区の場合にはこの割合にかなり及ばないのが実態である。

このように、この地区の学校教育はカリキュラム、教材ともに整っていないが、子どもたちがそれに失望する様子はない。アンケートを実施した学校での聴き取り調査では、子どもたちは大半が「学校が好き」「学校でもっと勉強したい」と表明している。大学に進学して専門的な知識を得たい、世界の色々なことを知りたいとアンケートで答えた子どもは387人中

376人 (97.2%) におよぶ。

また、子どもたちが学校を好む理由のひとつとして、学校では他の子どもたちと共同で様々な遊戯、特にサッカーを楽しめることが挙げられる。彼らは休憩時間になると、学年を問わずチームを作り、時には教師も参加して試合を行う。隣接地区の小学校の子どもたちが試合を申し込んでくると、試合は学校の名誉を賭けた戦いと化し休憩時間を超過しても続行されることもある。これに関してある教師は、机上で学ぶことだけが勉強ではなく、チーム作り、戦略、駆引き、応援、団結、そして地域の人々との交流もまた実践的な学習だと言う²⁸⁾。アンケートの結果も、子どもたちが集団で行うスポーツに強い関心を持っていることを示している。表—3は趣味は何かという質問に対する子どもたちの回答等を示しており、子どもたちの趣味が多彩で、コンピュータゲームやスケートボードなど時代を反映するものもある一方で、スポーツを趣味に持つ子どもが多く、なかでもサッカーとバスケットボールが1位、2位を占めている。人間性は集団的な遊びなくしては正しく成長しえないというクーリーの言にしたがえば²⁹⁾、下層の子どもたちの社会化にあたっては、知識の授与以上に、学校が集団スポーツの場として重要な役割を果たしていると考えられる。

表—4は、子どもたちが将来従事を望む職業（職業分野）を集計した結果である。多様な職業名が列挙されており、それらは表—1と比較するな

表—3 趣味

(N=387)

趣味	人数	%	趣味	人数	%
サッカー	120	31.0%	コンピュータゲーム	10	2.6%
バスケットボール	67	17.3%	バレーボール	8	2.1%
スポーツ一般	20	5.2%	ローラースケート、スケートボード	7	1.8%
テレビ観賞	18	4.7%	友人との会話	7	1.8%
音楽観賞	17	4.4%	水泳	6	1.6%
ダンス	15	3.9%	その他	35	9.0%
勉強	12	3.1%	特になし	32	8.3%
読書	11	2.8%	無回答	2	0.5%

出所) アンケート調査より筆者作成。

表一 4 将来就きたい職業

(N=387)

職業	人数	%	職業	人数	%
医師	57	14.7%	消防士	4	1.0%
弁護士	23	5.9%	インテリアデザイナー	3	0.8%
教師	22	5.7%	プロスポーツ選手	3	0.8%
システムエンジニア、プログラマ	20	5.2%	医療関係	3	0.8%
サッカー選手	15	3.9%	会社員	3	0.8%
建築家	15	3.9%	経営コンサルタント	3	0.8%
保母	14	3.6%	薬剤師	3	0.8%
会社経営者	14	3.6%	NASA で仕事	2	0.5%
学者	11	2.8%	ファッションデザイナー	2	0.5%
会計士	10	2.6%	ファッションモデル	2	0.5%
エンジニア	9	2.3%	運送業	2	0.5%
看護婦	9	2.3%	歌手	2	0.5%
秘書	9	2.3%	画家	2	0.5%
獣医	8	2.1%	兵士	2	0.5%
なんらかの専門職	7	1.8%	主婦	2	0.5%
観光業	7	1.8%	俳優	2	0.5%
スタイリスト	5	1.3%	情報科学の分野での仕事	2	0.5%
パイロット	5	1.3%	政治家	2	0.5%
法律家	5	1.3%	電気屋	2	0.5%
マスコミ関係	4	1.0%	グラフィックデザイナー	2	0.5%
警察官	4	1.0%	未定	33	8.5%
			その他	33	8.5%

出所) アンケート調査より筆者作成。

らば、同じように多彩な職業が列挙されてはいても、子どもたちは親よりも収入に勝り、「格好のよい」職業に憧れている。このように将来の夢を抱き、多彩な趣味を持ち、勉強精神旺盛な子どもたちの姿からは、ルイスが主張するような将来への絶望感や無気力は感じられない。

2 教師の姿

家庭において接する大人たちとは別に、学校において子どもたちが日々接する教職員の思考や行動は、社会化の過程においてとりわけ影響が大きく、彼らの今後の人生に反映すると考えられる。

Ⅲ—2でも触れたが、公立学校の教師たちは、政府の政策で給与を据え置かれており、物価の上昇によって総体的に生活水準が低下したため、副

業を持つことが多い。ある学校では教職員22人中18人が何らかの副業を持っており、午前5年生を受け持ち、午後は別の学校で校長の職に就いている者、午前中鶏肉屋で働いて、午後の授業を担当する者、教師仲間を対象に貴金属の商売をしている者などがいる。また教師同士で講「タンダ」³⁰⁾を組織するなど、彼らの多くは生活を維持するために収入増加の工夫をしている。これらの活動は校内で行われる場合があるので、子どもたちにも知られ、タンダに関してはまれに子どもが参加することもある。メキシコの教育問題を論じるニエブラは、公立校教師の学問的水準の低さ、教育意欲の欠如、副業を持つ教師の多さを挙げ、その生徒たちの将来は暗いと述べているが³¹⁾、概して教師たちは子どもたちに好かれており、彼らが副業を持つことも違和感なく子どもたちに受け入れられている。表—4で22人の子どもが将来の職に教師を選択している事実を考慮すれば、教師たちの生き方は選択肢の一つとして、子どもたちに希望を与えている可能性は否定できない。現実と折り合いながら、生徒たちを導こうとしている教師たちの姿は、教授される知識や集団での活動に加えて、子どもの社会化に影響を与える重要な要素となっている。

V 家庭や地域における活動

1 家庭内での活動

国立統計・地理・情報科学研究所 (INEGI) によると、この地域の持ち家率は約80%である³²⁾。治安が悪く犯罪が多発しているため、あまり外で遊ぶことができない年少の子どもたちにとって、自由の利く自宅や親族の家は、安心して過ごすことのできる重要な場所となっている。

アンケート中で、家での手伝いについて尋ねたところ、387人中365人(94.3%)が何らかの形で家族を助ける活動を日課としていた。多くは家事労働をしており、内訳は、衣服を手で洗濯する、食事の後片付け、部屋と中庭の掃除、幼少のキョウダイやイトコの世話、親の商売の手伝いである。70人(18.1%)は労働で収入を得て家計を助けていた。家事労働が中

心とはいえ、子どもにとってそれは決して簡単な作業ではない。295人（76.2%）が電気洗濯機を持っていると答えたものの、普段は石の洗濯板で洗っており、また家に水道のない子どもが33人（8.5%）いるので、洗濯とはいえ我々の想像以上に労力と時間を要する。風呂の支度をするときは、深鍋に水を汲みガスコンロで湯を沸かし、一人が入り終わるとまた同じことを繰り返す。家族が多いので全員の支度はかなりの重労働となる。

多くの場合、子どもたちは中庭にある洗濯場や流し台で作業をしながらキョウダイやイトコ、姪、甥の面倒を見ており、家畜を飼っている家であればその世話もする。便所と水浴び場も中庭にあるので、そこは家事や育児のための重要な生活空間になっている。大抵の家では中庭にスピーカーが取り付けられてあり、屋外で家事労働をしながらラジオやカセットを聴くことができるので子どもたちにとって退屈しのぎになる。屋内の家事もテレビをつけて行っていることが多い。

テレビとラジオに関しては、ほとんどの家庭がどちらかを所有しており、アンケートでも電化製品の中でテレビの所有率が382人（98.7%）と最も高い数値を示した。家事と幼いキョウダイやイトコの世話に長い時間を費やす年長の子どもたちは、家事空間を狭い室内から中庭に拡張し、テレビ、ラジオなどを最大限活用して、僅かでも効率よく楽しく作業を進めようとしているように見える。同時に、テレビ、ラジオは、遠方への旅行とはあまり縁のない子どもたちにとって、単なる娯楽以上に外の世界を知る手段として有用な道具となっている。米国に出稼ぎに出ている家族や親族の影響も考えられるものの、何よりもそうしたメディアを介して、米国は勿論、ヨーロッパのこともアジアのことも知識があり、旺盛な興味を抱いており、そうした情報を自分とは無関係な外部世界の出来事として捉えてはいない。

2 商売と相互扶助

上記のように、子どもたちは普段家の敷地内で過ごすことが多いが、同じ通りに住む隣人たちとも多彩な経済的関係を結んでいる。大人たちも含めて、貰ったり安く仕入れたりした食品や物品を、隣人同士がさらに安価

で譲り合い、相互扶助的な経済活動から恩恵を得ることはごく一般的である。子どもたちは菓子、使い古しの文房具を出来る限り隣人から購入しようとする。市価の半値から五分の一で買えるので出費を抑えることができ、逆の立場になったときも収入が期待でき、僅かな収入でもバス代などの雑費が捻出できるからである。しかし、いつ、何を、どのくらい入手できるかは誰も分からないので、日頃から相互に声を掛け合うことが重要になってくる。

大人たちの多くは企業や公的機関の社会保障を受けていない³³⁾。それゆえ安心感を持って生活するには自分たちで工夫しなければならない。生活を維持するために自然発生した隣人との相互扶助は、経済的に同じ立場であるという共同意識をその根底にもっており³⁴⁾、子どもたちが最初に経験する家族、親族以外の助け合いとなる。同様の相互扶助は仕事においても発揮され、親の商売を手伝う子どもたちによって習得されていく。

イスタパラパとトラウアクの隣接地帯は一大商業地で、特にイスタパラパ側には小商店、屋台、露店が密集している。クロスによると、この地域の小商人は1980年から1990年の10年間で5,055人から7,094人に、つまり40%も増加しており、1991年の調査では、メキシコ市全体の小商人の半数以上がイスタパラパに集中している³⁵⁾。膨大な数の小商人に買い物客が加わり戦場のような活気を呈している中で、固定客を掴む為の戦略や儲けを増やす方法、トラブル発生時の助け合いなどを、子どもたちは親や周囲の大人たちから学んでいる。

ある子どもは、上手な商売とは、①気前よく味見をさせる②おまけをつける③はかり売りの物は秤を揺らして目方をごまかす④目方の多いものは前もって目盛をプラスにしておく、といった手法を客を見極めて使い分け、手際よく行うことだと筆者に話す³⁶⁾。ごまかしばかりでは客が離れるので注意を要し、常連客には増量サービスを心掛ける、感謝の気持ちを忘れないなど、工夫も必要だという。つり銭が不足した場合、隣近所の商人から借り、調味料や材料の不足も同様に間に合わせる。急用で一時的に店を留

守にする時でも、商人同士普段から協力し合い信頼関係を構築していれば安心して頼むことができる。これらもまた、親の商売を通して子どもが習得する重要な事柄である。

小商売をしている人々は概して、まとまった資金を持ち合わせておらず、金融機関とも繋がりが無い。そこで、商人仲間でタンダを組織して、仲間が納めた会費を受け取る順番に当たる商人は、それを商売に投資する。子どもたちは、このような資金繰りの方法も、親の商売を手伝う過程で身につけ、ときとして学校などで小さなタンダを組むといった応用を試みる。曜日ごとに移動する青空市場「ティアングス」の手伝いでは、幾つかの地域に固定客を掴むことの重要性を学ぶ。それらの客は消費者でもあり、情報源でもある。家族成員が異なる商売、例えば父親は鶏肉屋、母親はタマーレス³⁷⁾作りをしていると、ティアングスの移動先で父親が固定客のルートから祝宴用のタマーレスの注文を400個、600個と受けてくる³⁸⁾。メキシコ人の好物で、メキシコ人のアイデンティティとの関連についての研究³⁹⁾までであるその食べ物には、ルート伝いに階層の差なく注文が入り、儲けは非常に大きい。このように子どもたちは、商売の方法次第でいかようにでも儲けられること、商人同士のネットワークや客との繋がりが重要だということを、経験を通して学んでいく。小学生の頃から商売を手伝っている子どもは、中学生になれば一人前とみなされ、店を任される機会が増えてくる。小さな屋台ではあるが彼らは店主として商いを行うようになる。

「たとえ工場労働による収入のほうが勝っても、彼らは通りでの物売りを生活手段として選ぶ」と、クロスは物売りの証言をひいて述べており⁴⁰⁾、筆者も全く同様の意見を人々から聞いている⁴¹⁾。小商人たちが主張するのは、工場や大手スーパーなどでは、監督、上司といった目上の者に使われ、労働を強制されるが、通りの商売は、時間的な拘束がなく、通行客とつかの間の会話を楽しむこともでき、その種の仕事の最大の魅力は、独立した店主として努力と工夫次第で収入増加や店舗拡大を図れることにあるという点である。子どもたちもまた、親を手伝う過程でそうした価値観を共有

するようになる。

学校以外の場所で半日を過ごす子どもたちは、家庭においても仕事においても、家族にとって重要な役割を果たしていることから、「小さな大人」であることを目指す。日本では、子どもが子どもらしくいられない「小さな大人」という言葉はしばしば否定的に捉えられるが、彼らは「小さな大人」であることに誇りを持っている。その姿からは抑圧、疎外という言葉は想像できない。

ルイスが挙げた「貧困の文化」の諸特徴に、無気力、強い周辺性意識、絶望感、依頼心、劣等感と視野の狭さがある⁴²⁾。「彼らは地方的な感情を持っており歴史観念が乏しい。彼らが知っているのは、自分たちの問題、自分たちの地区の常態、自分たちの生活様式だけである」⁴³⁾とルイスは述べているが、参与観察とアンケートの結果、子どもたちの日常生活からは、家庭においても地域においてもそうした無気力や絶望感、劣等感は感じられない。それどころか、彼らは経済的に苦しければ、隣人同士で相互扶助を行い、僅かでも支出を減らし収入増加を心掛け、また家事労働を工夫している。大人たちに家事や仕事を任されることで、彼らの心には責任感と独創性が培われる。下層の人々は知識も活動も自分たちの狭い生活空間に限定されると多くの研究者はみなすが、メキシコのような大都市では、アンケートが示すように、下層とはいえテレビの所有率は100%に近く、その他からも多くの情報が入るので、子どもたちが他地域や外国の知識に乏しいことはなく、また活動範囲も地域内だけに制限されることはない。ティアングスなどで異なる地域を回ればそれらの地域社会の人々との間に個人的な結びつきができ、後期中等教育、高等教育まで進めばネットワークはさらに拡大していく。

VI おわりに・結論と展望

本稿では、地域社会への社会化の過程で影響を与える人々との係わりを通して下層の子どもたちの生活様態を論じた。各節を要約するとまず、就

学前の子どもたちは、放棄、疎外されるどころか、多様な学歴や職業を持つ家族成員や親族に囲まれ成長していく。小学校生活では、授業のみならず休憩時間の遊びや教職員たちの生き方から、社会で生き延びるための工夫、努力、行動力を習得していく。家庭や地域社会では、家族の手伝いを通して家事労働の工夫、隣人同士の相互扶助、商売の方法や戦略、商売仲間や客とのネットワーク作りを学んでいく。このような分析から、子どもたちが将来の夢を抱き、各自の役割を遂行しつつ成長していく様子が明らかになった。

子どもたちは努力をすれば高等教育を受けることができ、経済的には商売次第で公務員やホワイトカラーの人々より収入を得ることも可能である。社会保障の欠如は、親族や隣人同士の相互扶助、商売のネットワークで相互に補うことが出来る。

確かに、メキシコ社会は家系や所有による階級格差が大きく、階級間の移動が困難ではあるが、下層の子どもたちは何ら人生の選択肢を見出せない閉塞状況におかれているとは言えない。クーリーは、社会環境によって与えられた生活領域から離れる望みや力を持たない諸個人の自由として「階級としての自由」という概念を提起し、それがさほど特権を持たない集団に属する人々に、独自の正義と機会を用意し、また、温か味のある生活を可能にすることで、階級から出て行くための機会ではなく、その中で向上するための機会を与えると述べている⁴⁴⁾。階級としての自由だけが下層の人々に与えられているという彼の考え方は疑問だが、下層の人々を全ての権利を剥奪された存在として矮小化しない解釈は本稿の分析とも合致している。下層の人々はひとつの階級を構成していると同時に、それを取り巻くメキシコ社会の一部をも構成していることを考慮すれば、彼らは階級としての自由を享受しつつ、さらに全体社会の構成員としてその中で上昇していく可能性をも追求し、彼ら自身が人生を選択していると捉えるのが適切であろう。そしてこの自由を保証するのが家族との結びつきや隣人たちとの相互扶助、商売のネットワークなのである。

筆者は彼らを美化するつもりはないし、彼らを扱った諸研究を否定するつもりもない。実際、下層の子どもたちが全て健全な生活を送っているわけではなく、不良集団「バンダ」を形成して逸脱行為を働くなどの問題や子どもの遺棄・虐待も数多く報告されている。しかし下層の子どもたちの「負」の面だけが一般化される理由もない。階級格差の問題と被抑圧者側に属する人々の人間性を否定することとは別問題であり、ルイスのように、貧者にときとしてみられる精神的な傾向を、それを生み出す構造的な問題を無視して人間性の欠陥として取り上げ、貧困の文化の特徴として普遍化すること⁴⁵⁾こそが、抑圧者側の理論を正当化することにつながりかねない点に注意しなくてはならない。そのように、社会を分割して自分とは異なる集団に属する人々の人間性を否定することが、まさしくオリエンタリズム的言説⁴⁶⁾を作り出すのである。

さらに研究を進める上で注目すべき点は、この地域の人々と地方農村との繋がりである。メキシコ市でも都心部にあたる連邦特別区でありながら、ルイスがその書 *Tepoztlán*⁴⁷⁾で例示するような農村的暮らしの部分が残っているのは、単に開発が遅れているだけではなく、それらの地区の居住者の多くが周辺農村の出身であり、移住してからも出身地との結びつきが強く、周辺の文化が絶え間なく入り込んでいることが大きく関わっている。同時に、都市住民の一部として、彼ら自身も周辺農村に対して近代的セクターの抑圧機構の一部として機能している可能性もあり、その意味では、都市と農村という問題を考察するための媒介項として、都市の下層民をとらえる必要があるだろう。ホセ・カルロス・マリアテギは、富める都市と貧しい周辺地域の断絶を強調し⁴⁸⁾、ロバート・レッドフィールドは、フォーク（習俗社会／農村）—アーバン（都市）連続体説⁴⁹⁾を述べたが、もはや両者の関係は、単に「連続」「不連続」「対立」などを議論するだけでは不十分なほど複雑な様相を呈している。この複雑な社会構造を読み解く鍵として、都市下層民の実態研究が深化継続されるべきであろう。

謝辞

本稿は、1999年度上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻修士論文「メキシコ市南部の人と暮らし—トラウアクにおける事例研究—」の第4章第2節「子どもの生活」を、イスタパラバ区も加筆して大幅に書き換えたものである。修士論文および本稿の執筆に当たり、上智大学の高山智博・赤堀雅幸両指導教員に数々のご指導を賜った。同大学の小林一宏先生からもお力添えを頂いた。また拓殖大学の安富雄平先生からは貴重な助言を頂いた。この場を借りて深く感謝を申し上げる。

なお本稿では、プライバシーを考慮し、資料提供者の実名、アンケートを実施した学校の名称および具体的な地区名は秘してある。調査時点における社会分析が目的であることから、本稿では時制を現在形に統一する。

注

- 1) 一般にメキシコ社会のみならず、ラテンアメリカ全体において、ダルシー・リベイロが描いた4階層—支配階級・中間層・下層・被抑圧階級—からなる階層モデルが多く適用されるが、メキシコの場合1960年代の好景気による中間層の増大、1982年の対外債務危機以降の経済悪化による中間層から下層への没落や、下層と被抑圧階級の境界が曖昧であること、被抑圧階級を含め下層として扱われるなど、下層を定義づけるのは困難であるように思われる。それゆえ本稿では、主に下位の2階級を指して「下層」の語を用いる。
- 2) 本稿では、メキシコで義務教育として定められている中学三年生までを「子ども」として扱う。
- 3) 湯川攝子『メキシコ経済論』大明堂、1982年、131—132ページ。
- 4) 一部の開発業者が、都市開発行政規定に違反して不法に土地を分譲することが、メキシコでは行われてきた。
- 5) 幡谷則子『ラテンアメリカの住民組織』古今書院、1999年、162ページ。
- 6) 1999年現在、16の連邦特別区とメキシコ州の29のムニシピオを含むメキシコ市大都市圏を指す (Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática, *Estadísticas del medio ambiente, edición*, 1997 [México: Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática, 1997])。
- 7) 細野昭雄「メキシコの経済発展と都市化」昭和58年度文部省科学研究費海外学術調査報告書『メキシコ市の都市発展—都市首位性拡大の諸要因に関する学際的研究』筑波大学、1985年、62—63ページ。
- 8) 幡谷前掲書、13ページ。
- 9) オスカー・ルイス『サンチェスの子供たち—メキシコの一家族の自伝』柴田稔彦・行方昭夫訳、みすず書房、1969年、xix—xxii ページ。

- 10) Larissa A. de Lomnitz, *Cómo sobreviven los marginados* (México : Siglo XXI, 1975).
- 11) Roger N. Lancaster, *Life is Hard : Machismo, Danger and the Intimacy of Power in Nicaragua* (Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1992).
- 12) Roberto Varela, "¿Crucifixión por la cultura?", en *De lo local a lo global : Perspectivas desde la antropología* (México : Universidad Autónoma Metropolitana, 1994), pp.125-137.
- 13) Hernando de Soto, *The Other Path : The Invisible Revolution in the Third World* (New York : Harper and Row, Publishers, 1989), p.237.
- 14) John C. Cross, *Informal Politics : Street Vendors and the State in Mexico City* (California : Stanford University Press, 1998).
- 15) 社会的逸脱を語る論文を挙げると、e. g., Leticia Ruiz de Chávez P., *La delincuencia juvenil en el Distrito Federal* (México : Universidad Nacional Autónoma de México, 1959) ; Fernando Villafuerte, Israel López Chiñas and Jesús Nava Ranero, *Donde empieza el silencio : Genealogía de las bandas juveniles* (México : Consejo Nacional de Recursos para la Atención de la Juventud, Centro de Estudios sobre la Juventud Mexicana, Consejo Popular Juvenil, 1984) ; Francisco A. Gomezjara, *Las bandas en tiempo de crisis* (México : Ediciones Nueva Sociología, 1987)。
- 16) メキシコ市における下層民や貧困の研究では、テピートなどの旧市街地や周縁部のネサルコヨトルなどが取り上げられることが多く、その他の地区はあまり注目されてこなかった。イスタパラバ区とトラウアク区もその例外ではない。この広大な下層地区には筆者の留学当時 (1982年) からの友人を通じて知り合った人々が居住しており、人的接触や資料の入手が可能だったことから調査地とした。ただし、両区の全域が貧困地区であるわけではなく、イスタパラバ区南部から南東部と、そこに隣接しているトラウアク区北西部から中央部にかけての地域が調査対象である。
- 17) トラウアク区の経済活動人口61,253人 (トラウアク区全人口の29%) の月収水準は、最低賃金未満25.0%、最低賃金から最低賃金の二倍未満49.3%、二倍から三倍未満13.7%、三倍から五倍未満6.2%、五倍以上3.1%、無回答2.7%。1995年連邦特別区の最低賃金 (月収) は549ペソ (1995年1月現在1ドル=5.47ペソ) である (Gobierno de la Ciudad de México, *Tláhuac : Monografía* [México, COMISA, 1996], p.27)。イスタパラバ区の資料は入手出来なかった。

マヌエル・カステルがメキシコ市の経済活動人口を5層に分けているが、

そのうち61%を占める下の二つの層の職業従事者がこの地域の居住者の多くを占めると推定される。つまり準専門家、下級官吏、商店主、事務員、給仕、屋台・露店商人、運転手、未熟練・半熟練・熟練労働者、農業労働者、兵士、左官、行商人などである (Manuel Castells, "Apuntes para un análisis de clase de la política urbana del Estado mexicano," *Revista Mexicana de Sociología*, vol. 39, núm. 4 [oct.-dic., 1977], p.1169)。

- 18) 奥山恭子「ラテンアメリカ子ども研究—その意義・役割・方法」奥山恭子・角川雅樹編『ラテンアメリカ 子どもと社会』新評論、1994年、14ページ。
- 19) Charles H. Cooley, *Social Organization: A Study of the Larger Mind* (New York: Schocken Books, 1962), pp.23-24.
- 20) アンケートを実施した年月日と区は、S校 (1999年6月7日、イスタパラバ区南部)、T校 (同年6月8日、イスタパラバ区南部)、U校 (同年6月9日トラウアク区北西部)、V校 (同年6月10日トラウアク区北部)、W校 (同年6月14日トラウアク区北部)、X校 (同年6月15日トラウアク区中央部)、Y校 (同年6月16日イスタパラバ区南東部)。

アンケートの質問項目の逐次的一覧 (スペイン語) は以下のとおり。

I ¿Cuántas personas hay en tu familia? Y ¿Cómo son?(llena el cuadro [miembro, edad, carrera educacional escuela y grado, ocupación, lugar de nacimiento estado o delegación, lugar donde vive]), II 1. ¿Cuáles de éstos tiene tu familia? (los que tiene— , los que no tiene— , [televisor, radio, radio cassette, componente, video, refrigerador, lavadora eléctrica, estufa de gas, horno microondas, batidora, máquina de coser, teléfono, teléfono celular, computadora, toma de agua, letrina, regadera, cuarto de baño, bicicleta, motocicleta, coche]), 2. ¿Qué tipo es tu vivienda? (marca con el signo) , 3. ¿Cuántos cuartos hay en tu vivienda? (marca con el signo) , 4. ¿Qué tipo de bebida alcohólica toma tu padre generalmente? (marca con el signo) , III 1. ¿Quién tiene más el poder decisivo sobre los asuntos familiares?(marca con el signo) , 2. ¿Quién maneja principalmente la economía doméstica?(marca con el signo) , 3. ¿Con quién confías más en tu familia? (marca con el signo) , IV 1. ¿Tienes alguna experiencia de ganar dinero? (marca con el signo y escribe), 2. ¿En qué forma ayudas para la familia en tu casa? (escribe concretamente), 3. ¿Qué haces generalmente en el día de descanso? (escribe concretamente), 4. ¿Qué afición tienes? (escribe), 5. ¿Quién es tu ídolo? (cualquier campo que sea, escribe su nombre y profesión), 6. ¿Después de salir de esta escuela, quieres seguir el estudio? (escoge y escribe), 7. ¿En qué tipo de trabajo quieres dedicarte en el futuro? (escribe), 8. ¿Quieres ir al

extranjero en el futuro? (escoge y escribe), 9. ¿Con qué país sientes más simpatía? (escribe), 10. ¿Cuál problema social en la Ciudad de México es más importante? (escribe tu opinión), 11. ¿Qué te parece la vida cotidiana en Iztapalapa / Tláhuac? (escribe tu opinión), 12. ¿Qué es lo que es más necesario para mejorar Iztapalapa / Tláhuac? (escribe tu opinión).

- 21) E. g., Lancaster, op.cit.
- 22) メキシコには3種類の婚姻形態が存在する。法律上夫婦として承認されるのは、教会が認める教会婚と民法に基づく民事婚である。もう一つは婚姻届を提出しないので法律では承認されないが、人々に広く認められている内縁関係「合意婚」による婚姻である（奥山恭子「メキシコにおける家族と家族法」早稲田大学大学院『法研論集』第20号、早稲田大学大学院法学研究科、1979年、27—54ページと、1999年7月3日トラウアク区C地区に於ける聴き取り調査より）。
- 23) トラウアク区A地区の家族。1999年6月5日から7月3日の参与観察による。
- 24) Patrick Staelens, *La problemática del niño en México* (México : Universidad Autónoma Metropolitana, en coedición con UNICEF, 1991), p.75.
- 25) ジョージ・P・マードック『社会構造—核家族の社会人類学』内藤莞爾訳、新泉社、1986年、31—32ページ。
- 26) 例えば、6歳以上14歳以下の人口と非識字者数およびその割合は、イスタパラバ（全体316,092人、非識字者22,979人（7.3%））、トラウアク（全体49,822人、非識字者4,310人（8.7%））であり、これらは連邦特別区全体（全体1,407,669人、非識字者89,769人（6.4%））の割合を上回っている（Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática, *Distrito Federal, Censo de población y vivienda 1995, Resultados definitivos tabulados básicos* [México : Instituto Nacional de Estadística, Geografía e informática, 1996], pp.108—109）。
- 27) Gilberto G. Niebla, "La escuela primaria : El aula que quedó," *NEXOS*, vol. 15, núm. 170 (febrero 1992), pp.31—36.
- 28) 1999年6月17日S校に於いて。
- 29) Cooley, op. cit., p.49.
- 30) 信頼における友人同士で即席に組織される講。5人から組織可能だが、大人数だと問題が起りやすいので、10人前後で組織されることが多い。責任者が、一定の日に、予め決めた会費をメンバーから徴収し、その日の順番に当たるメンバーに全額を渡す。最後の順番までいくとタンダは解散される。
- 31) Niebla, "El malestar educativo," *NEXOS*, vol. 15, núm. 170 (feb. de 1992),

pp.21-30.

- 32) Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática, op. cit.
- 33) 1999年6月29日、トラウアク区中央部D地区での聴き取り調査では、12家族中社会保障を受けている成人はひとりもいなかった。
- 34) De Lomnitz, op. cit., p.221.
- 35) Cross, op. cit., p.92.
- 36) 1999年6月12日トラウアク大通りに於いて。
- 37) 練ったトウモロコシ粉にさまざまな具を入れ、トウモロコシの葉で包んで蒸した伝統料理。
- 38) 1999年6月17日イスタバラパ区A地区に於いて。
- 39) Jeffrey M. Pilcher, *iQue Vivan los Tamales! Food and the Making of Mexican Identity* (Albuquerque : University of New Mexico Press, 1998).
- 40) Cross, op. cit., p.104.
- 41) 1999年6月13日トラウアク大通りに於いて。
- 42) ルイス『ラ・ビーダープエルト・リコの一家族の物語1』行方昭夫・上島建吉訳、みすず書房、1970年、37ページ。
- 43) ルイス同上書、35—38ページ。
- 44) Cooley, op. cit., p.246.
- 45) ルイス前掲書、32—38ページ。
- 46) エドワード・W・サイド『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1993年。
- 47) Oscar Lewis, *Tepoztlán : Village in Mexico* (Urbana : University of Illinois, 1960).
- 48) José Carlos Mariátegui, *7 Ensayos de interpretación de la realidad peruana* (Lima : Biblioteca Amauta, 1928).
- 49) Robert Redfield, *The Little Community and Peasant Society and Culture* (Chicago and London : University of Chicago Press, 1963).